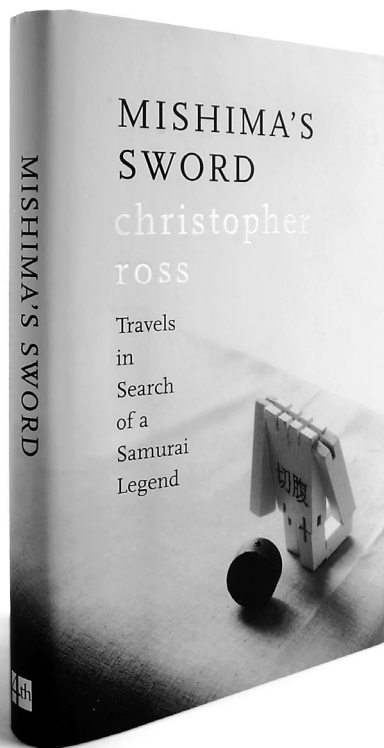


CHRISTOPHER ROSS,
Mishima's Sword (Fourth Estate, 2006)

評者 彦智智彦
官道報副務外

渋谷のイギリス人 自分探しの旅とその終わり

英語の本としては珍しく「私小説」の分類にあてはまりそうな作品である。

作者の筆は武士道の真髓を説き、日本刀の合金技術を述べる。禪の結び方にまで、図解をまじえた具体的描写を与えている。

また物語は何重かの入れ子になっていて、三島由紀夫が市ヶ谷で死んだあの日、1970年11月25日の推移が、早晩から三島の首が血しぶきを飛ばして床に転がるその瞬間まで、劇中ドキ

ュメントとして語られる。

しかしそれら本書を彩るノンフィクション的要素にかかわらず、これはあくまで書き手自身を主人公とし、その成長を主題とする物語である。作者の年齢からするとそぐわぬようだが、一種のBildungsroman（成長小説）と言つてよい。読者は作者と主人公と同伴し、探求の旅とともにするのである。

その探求とは、三島が自分の首をはねさせるのに使った名刀「関の孫六」の在り処を突き止めることだと定義さ

れる。行文は巧まずして宝探し物語の筆法をとることとなり、それが全編にサスペンス感を与えた。

「三島の刀 (Mishima's Sword)」という題はそこから来た。けれども視覚のトリックを援用し、これは「三島の言葉 (Mishima's Word)」とも読ませる仕掛けになっている。ここに示唆的であるように、作者は、珍品を追い求める好事家では無謀ありえない。

三島を捕えた問い

三島はどうして、あんな風に死なねばならなかったのか。三島において、「生の実感」とは果たしてあり得たのか。自分の存在を、アクチュアリティとともに自ら抱擁、承認することは、三島において可能だったのか。

探求はそこに収斂する。なぜならその多くは作者と主人公の、昔ふう言うなら「実存」の悩みと重なるからだ。結局主人公は、今生きて、此処にあることの実感を把握できずにいる。

「自分が生きるこの生が本物だと、どうすれば感じることが出来るだろうか。……それこそは三島を捕えて離さなかった問いであり、また私自身の問いで

もあつた」と作者は言う。

三島はそのあまり、いつも何か別物になろうとした。いくつもの仮面を身にまとい、自分を作り変えようと。

そんな三島の虜となった作者は、三島が恐らくは自己イメージを投影させて母国を見た時当然にも気づいた日本の国家像に、同じように思い至る。

すなわち日本とは、近代化に踏み出して以来、常に何者か、別の自我をもとうとしてあがき続けた拳句、己れの内部に大きな空洞を開けてしまった国ではないのか……。

神風連や西郷隆盛を三島の作品に事寄せ詳説するのは、自我意識を自ら引き裂く以前の日本とは何だったか、探るためである。それは歴史家のなす論ではない。

またもや作者Ⅱ主人公の悩みとダブる限りにおいての所説であり、この接近法は、日本という国を自ずから擬人化する。ここにおいて読者は、わが近代史の日本浪漫派的叙述が図らずも英国人によってなされたのを見る。

探求譚の入れ子構造

中心に向かって収縮する、立体的な

同心円をイメージするとよい。芯をなす円は、三島の刀である。それはどこまでも遠ざかっていく。物理的にも、武士の刀が日本古来の伝統的価値観を体現する限りにおいても。

一つ外縁には三島が、さらに外周に日本という一つの国があつて、その総体に引き込まれ、踏み込んで行こうとする主人公がいる。いずれも、何かを探し、何かになろうとしている者たちだ。探求譚の入れ子構造である。

三島に刀をやったのは、渋谷にある有名な書店（大盛堂書店）の店主だった。本屋の地下にはマニア向けショップがあり、そこは作者が初めて日本に英語教師として来た1990年代半ば、よく入り浸った場所だった。

探求譚の入れ子構造は、因縁の連鎖によつても立体感を帯びている。作者は渋谷にスナック兼住居を借り、そこから探求の旅をあちこちへ続ける。描かれた渋谷には、異邦人の目にのみ見える色があり、輪郭がある。

刀は依然、杳として行方を知らない。その間に作者は、ゲイ専用SMクラブへ足を踏み込む。禪を結ばねばならない羽目になりつつ、三島のかつての相手に会い、話を聞く。切腹遊戯によつて、

三島はエクスタシーを迎えたのだと。

生の実感、生の手触り

刀は結局見つかる。ある電話によつて、作者はとある退職警察官の家へ行く。これがそうだと、刃のこぼれた刀を見せられた。しかし作者には、どうしても実感が沸いてこない。彼が追い求めていたものが生の手触りであり、刀とはそれを逆説的に強く証明する仮象だったのであれば、くたびれた「実物」は、却つて実在感を持ち得ない。

深い徒労感が作者を襲い、何か憑き物を、彼から落とす。「生を証するための死」という妄執が、この時落ちた。ラストシーンで、作者は渋谷道玄坂「109」の前に佇立し、打ち寄せる人波と、聞こえてくる日本語の断片に自らを洗わせる。その時だ、死の誘引が自分の中からきれいに消えてしまおうとしているのを悟るのは。

傍らに立ち作者を眺める読者にも、突然の感動が襲う。全編を貫く主題が、初めてくつきりとした像を結んで立ち現れてくる。生の実感をもはや疑おうとしなくなった作者を、まさしく輪郭も鮮やかに見出すからである。☺